

平成 30 年 6 月 10 日現在

機関番号：14301

研究種目：研究活動スタート支援

研究期間：2016～2017

課題番号：16H06877

研究課題名(和文) 近世前期中期俳諧資料の整備と活用の研究

研究課題名(英文) Study on the Organization and Utilization of Haikai-related Materials in the Early to Middle of the Edo Period

研究代表者

河村 瑛子 (Kawamura, Eiko)

京都大学・文学研究科・助教

研究者番号：80781947

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,300,000円

研究成果の概要(和文)：近世前期中期俳諧資料の文化的価値を究明するため、当該資料群についての基礎的研究および応用的研究を実施した。主な成果としては、(1)俳書の全文翻刻データの集積、(2)古俳書解題目録の作成、(3)新資料による文学史上の諸問題の考察、(4)俳文学における書簡資料の意義の解明、(5)『俳諧類船集』の注釈的研究とその古典作品読解への活用が挙げられる。以上の研究成果を5つの口頭発表と4篇の論文によって示した。

研究成果の概要(英文)：The purpose of this study was to clarify the cultural value of haikai-related materials in the early to middle of the Edo period. To this end, the basic and applied research was conducted on the materials. The main results were as follows: (1) Transcribed haikai-books and accumulated full-text data. (2) Prepared annotated bibliography of Teimon and Danrin haikai-books. (3) Investigated issues in the history of Japanese classical literature using newly-founded materials. (4) Elucidated the significance of personal letters in haikai literature. (5) Annotated Haikai-Ruisensyu and utilized it for intensive reading of Japanese classics. These results were presented at five conferences and published in four journals.

研究分野：日本文学

キーワード：古俳諧 貞門 談林 芭蕉 連想 俳諧 書簡 書誌学

## 1. 研究開始当初の背景

文献中の言葉の意味を正確に把握することは文学研究上の根本的な課題であるが、時代を隔てた言葉の精密なニュアンスを知ることは容易ではない。殊に、基本的・日常的な語彙は文献上に残りにくく、語義を定めるのが困難である。

この問題を解決する糸口となるのが、本研究が対象とする俳諧資料である。俳諧は、史上初めて俗語を豊富に文字上に掬い取った文芸であり、とりわけ、近世前期に盛行をみた貞門・談林の古俳諧は、当時一般的な言葉の連想（つまり前近代人の共通認識）を軸とするため、作品の分析から語の微妙なニュアンスを把握しうる点で価値が高い。

しかしながら、古俳諧はその文学史的評価の低さと資料の膨大さから、正面から取り上げた研究は多くなく、従来、資料基盤が未整備であった。資料の大部分は未翻刻のままにあり、デジタルテキストによる検索は、僅かに『古典俳文学大系』(CD-ROM版、web版)や Japanknowledge の全文検索などが利用できるに留まっている。

かかる状況に鑑み、申請者は古俳諧の資料基盤を構築すべく研究に着手し、「古俳諧の全文データ集積に基づく『俳諧類船集』重要語彙の研究」(特別研究員奨励費) 京都大学若手研究者スタートアップ研究費等の助成を得て一定の成果を挙げた。

上記の研究により、研究代表者は古俳諧研究の意義を確信するとともに、古俳諧の資料基盤の完備と、古俳諧の史的意義の究明のためには、後続の貞享元禄期の俳諧資料を視野に入れつつ、さらなる研究作業を重ねる必要があることを認識した。

## 2. 研究の目的

以上のような背景を踏まえ、本研究では、古俳諧を含む近世前期・中期俳諧資料の研究基盤の充実を図り、その成果を多様な古典研究へ活用する可能性を追求する。これにより古俳諧を中心とした文化資源としての俳諧資料の史的価値を十全に解明する。

本研究では、文学史・文化史上重要な古俳諧の網羅的調査を推し進めるのみならず、貞享元禄期の資料の基礎的研究にも取り組む。寛永から元禄という時代を総合的に検討することにより、従来の研究では不十分であった通史的観点からの研究の実施や、芭蕉・西鶴などの元禄期の重要作品における諸問題の究明を試みる。

上記の基盤的研究を、応用的な古典研究へと発展させる際に基軸に据えるのは、貞門俳諧の連想語辞書『俳諧類船集』(梅盛編、延宝4年刊)である。本書は、いろは順に配された見出語に対し、連想語と短文による解説を付した付合語辞書であり、本書に記された連想を解明することは、当時の人々の世界観

の一部を共有する営みそのものといつてよい。これまでの研究において、本書の研究が古典研究に資する潜在力を持つことは確認済みであるが、いまだ注釈の及ばない部分が多く残される。膨大かつ難解な本書の連想を解明するには、連想を实践した俳諧の実作例の蓄積が不可欠である。本研究において、俗語資料として重要な近世前期・中期の俳諧資料を自在に活用できる環境を整えることにより、『類船集』の注釈的研究を高精度かつ効率的に遂行することを目指す。俳諧には和漢雅俗にわたる世の中のあらゆる事象が含まれており、本研究課題の達成は、文学研究にとどまらず、歴史学・民俗学・文化学などの隣接諸学にも貢献することが期待される。

## 3. 研究の方法

本研究は、(1)基礎研究としての資料基盤整備と、(2)応用研究としての古典研究への活用という二つの工程から成る。

## (1)基礎研究：俳書の資料基盤整備

まず、古俳書の網羅的な作品解題目録の作成を行った。粗稿となる編年体の作品目録「古俳諧作品目録」(河村瑛子『古俳諧研究』2016年3月、博士論文)に対し、全国の図書館・文庫の目録類や江戸時代の書籍目録、独自の資料調査によりながら、新出書・逸書を含めて書目を増補した。収録書については、諸本の状況を確認し、所蔵先より取り寄せた複写による調査と、所蔵先での原本調査とを行い、書誌・内容両面にわたる解題を付した。

また、未翻刻作品については、収集した写真をもとにパソコンで活字翻刻を行い、全文データを集積した。これにより、古俳諧の膨大な用例を飛躍的に効率よく活用できるようになる。また、異文がある場合は、その情報も校異として注記した。

さらに、貞享元禄期の俳諧・雑俳資料についても上記と同様に資料収集・調査を行い、文学史上の諸問題を検討した。

## (2)応用研究：古典研究への活用

本工程では前述の『俳諧類船集』を中心に扱った。まず、西鶴・芭蕉などの重要作家の作品を通読し、解釈上の問題を整理した。その上で、『俳諧類船集』について検討すべき重要語を選定し、全文データをはじめとした(1)の成果を駆使して注釈的研究を行った。すなわち、見出語と連想語との関係性を文献に基づいて分析し、言葉の精密なニュアンスを解明した。注釈作業においては、文学作品に限らず広く用例を収集し、同書の依拠書物や、隣接諸学の成果にも目を配りつつ行った。その成果は古典文学作品の読解へと還元した。

## 4. 研究成果

上記の方法により研究を実施した成果を便宜的に三部に分けて記述する。なお、下記の具体的新見については、すべて学会発表ないし論文において報告した。期間内に活字化できなかったものについては、現在論文文化を進めている。

#### (1)古俳書の基礎的調査に関する成果

古俳書解題目録の作成を進め、翻刻資料の全文データの集積を行った。解題目録には、書誌・内容の基本情報、特記事項、句数（発句・付句別）翻刻影印の所在等について記述した。他書との連関にも着目しつつ調査を行い、成立不明の書については、収録句の他出を調査して成立年次・編著者・成立事情の推定を行うなど、可能な限り考証を加えた。調査結果は解題目録に反映し、現在出版準備を進めている。また、全文翻刻の一部は公開した。

調査過程で得られた新見の一部を挙げれば、次のようなものがある。

俳諧撰集の嚆矢『犬子集』（寛永10年刊）巻17に収録される作者不明の前句付が、三浦為春作『七十句付』に由来することが判明した。諸本の比較により、為春が複数の人物に加点を乞うていること、また、自筆本との比較により、『犬子集』编者による修正が加えられていることなどが確認され、黎明期における俳壇事情の一齣が明らかになった。

岡山県立図書館に所蔵される熊沢淡庵一座の連歌書留（寛文11年成、連歌二十巻の高点句抜書）に、宗因の加点巻が含まれることが判明した。本書は井上通泰『蕃山考』（岡山県、1902年）に一部が紹介されて以来所在不明であり、『連歌総目録』にも未載である。本書所収の連歌には、後に談林の論客として活躍する惟中が一座する。寛文11年は、宗因・惟中が交流を開始した最初期にあたりと考えられ、本書は、両者の邂逅の背景に、岡山連歌壇の存在を考慮すべき可能性を示唆している。

全国に伝存する立圃の自筆俳書群の調査を行い、その内容を整理した。一部を挙げれば、近年出現した伊藤松宇旧蔵『立圃桃迺酒百韻』（京都府立京都学・歴史館蔵）について、本百韻が柿衛文庫蔵『撰津富田俳諧紀行』に記される紀行の旅中に成ったものであること、立圃を富田に招いた「利房」が、富田の酒造家、清水市郎右衛門家三代当主であることなどを示した。また、立圃の俳文集『六日の菖蒲』には上記紀行の異文が収められており、その異同が贈呈者の違いに起因することにも言及し、立圃の俳事の一部を明らかにした。

#### (2)近世前期中期俳諧資料の通覧調査に関する成果

古俳諧および後続の貞享元禄期の俳書を併せて調査し、以下のような成果を得た。

貞門七俳仙の一人でありながら、従来生

没年不明で、伝記に謎の多い梅盛について、梅盛の著述や実作、同時代俳人の言説などを用いて、その文事を素描した。特記すべき点としては『口真似草』（明暦2年刊）跋文に、梅盛が入集料を取らなかったとする記述が見られること、撰集に地方の初学者に配慮した工夫がなされること、『とてしも』（元禄16年刊）所収の歳旦句から、元禄15年末～16年初め頃までの生存が確認できることなどが挙げられる。

梅盛門の俳人であり、芭蕉句文「うに揺る岡」にも登場する高梨野也の俳事について考察した。新出資料を含む俳書への入集状況等を検討し、中央俳壇で活躍した野也が、伊賀移住後、同地を代表する俳人として認知され、若き日の芭蕉にとっては先輩格の俳人であったこと、延宝後半以降は俳壇から遠ざかっていたと思しいことを確認した。本句文における芭蕉発句は、引歌をも勘案すれば、上記の事情を念頭に置いた詠と考えられる。

俳文学における書簡の意義について、多角的に考察した。まず、『笈の小文』旅中に書かれた新出書簡について執筆時期・場所を従来よりも詳細に特定し、一連の書簡資料の吟味を踏まえ、『笈の小文』所収句の新解釈を提示した。また、俳文学においては古俳諧時代から書簡が作品の一部とされる傾向があり、特に芭蕉書簡は同時代から後年に至るまで一種の俳文として享受されたことや、芭蕉の文学活動における書簡の機能などを踏まえ、芭蕉が書簡を用いて作品の発信や門人の指導を行ったことは、必然的かつ意識的な営みであることを論じた。

#### (3)『俳諧類船集』研究の成果

基本語「かたち」について、『類船集』の注釈的研究を行い、当該語は単なる形状の意味ではなく、現実には実物・実体が存在しないにもかかわらず、あたかもそれが眼前にあるかのように感じさせるものというニュアンスを有することを指摘した。その上で、『奥の細道』『平泉』条をはじめとした芭蕉作品の精密な解釈を行い、芭蕉の詩想解明に応用した。加えて、「かたち」「かたみ」としての文字・書物の機能についても言及した。

日本人の心性や美意識にとって重要な「やさし」について考察した。当該語は日常性を帯びた言葉であるために和歌・連歌に用いられにくい一方、古俳諧には用例が頻出する。豊富な古俳諧の実例を用いた『類船集』の連想語の分析から、当該語のニュアンスの核に「意外性」の要素があることを指摘した。さらに、その成果を西鶴・芭蕉作品の精読と、それぞれの文学的特性の解明に活用した。

近代以降は冬の季語となる日常語「ひなたぼこ」について比較文学・比較文化的な見地から考察を加えた。『類船集』『日南北向（ヒナタボツカウ）』条の注釈的研究を行い、当該語は、前近代には必ずしも特定の季節と結びつかないこと、近世前期には都会人の日常

的な行為ではなく、負の意味合いをも有することを指摘した。一方、漢籍においては、日光に体を曝すことは自適の境地を表すモチーフとして用いられ、日本のそれとは異なる。また、近代に入ると、西洋より主に結核治療を目的とした「日光浴」の文化が到来する。これらの異文化の流入により「ひなたぼこ」の意味合いが揺動し、当該語が近代季語としての確立することを指摘した。

『俳諧類船集』の依拠情報について分析を行った。まず、原本の誤刻を引き写している箇所を指摘し、本書の編集に用いられた版本の推定を行った。また、採録される伝承歌に着目し、同時代に流布した天神仮託歌集を使用した可能性があることや、「万葉擬歌」が含まれることを指摘し、それらと芭蕉作品解釈との関係性について考察した。また、「桃太郎」のような昔話の断片や童詞など、文献資料に残りにくい事柄を含むことをも確認し、本書の文学研究上の意義について考察した。

以上のように、本研究は、近世前期中期俳諧資料の文学史的・文化史的価値を多角的に実証した。本研究課題の成果は、基礎・応用両面において俳諧研究の促進に資するものであり、日本文学研究・文化研究にも貢献するものと思われる。

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 4 件)

河村 瑛子、「負日」の系譜 「ひなたぼこ」の和漢、アジア遊学、査読無、2018、印刷中

河村 瑛子、『立圃桃廼酒百韻』の周辺、京都大学国文学論叢、査読有、39号、2018、1-12  
DOI: 10.14989/230784

河村 瑛子、古俳諧の「やさし」、国語国文、査読有、87-3巻、2018、1-18

河村 瑛子、「かたち」考、国語国文、査読有、86-5巻、2017、372-382

〔学会発表〕(計 5 件)

河村 瑛子、古俳諧の世界 書誌・形式・言葉、京都大学国文学会(招待講演) 2017

河村 瑛子、芭蕉文学における手紙 書簡と作品のあいだ、名古屋大学国語国文学会(招待講演) 2017

河村 瑛子、「かたみ」の文学 芭蕉の詩想と『奥の細道』、芭蕉大学(招待講演) 2017

河村 瑛子、立圃の俳書と柿衛文庫、柿衛忌(招待講演) 2017

河村 瑛子、『俳諧類船集』注釈上の諸問題、京都近世小説研究会、2016

〔図書〕(計 0 件)

〔産業財産権〕

出願状況(計 0 件)

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：  
出願年月日：  
国内外の別：

取得状況(計 0 件)

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：  
取得年月日：  
国内外の別：

〔その他〕  
ホームページ等

#### 6. 研究組織

##### (1) 研究代表者

河村 瑛子 (KAWAMURA, Eiko)  
京都大学・大学院文学研究科・助教  
研究者番号： 80781947

##### (2) 研究分担者

##### (3) 連携研究者

##### (4) 研究協力者

( )